



### 会長就任のご挨拶

城尾昌範

理学同窓会員の皆様、お変わりございませんか。この度は、会長就任予定であった野田善郎先生の思いがけない急逝により、2008年3月から同窓会長代行を急遽仰せつかり、役員の皆様と共に同窓会の総会の準備をして参りました。9月には多数の卒業生の方々の参加のもと総会が開催され、理学部発足40年の節目にもあたる年に同窓会会長に推挙されたことに対して身に余る光栄と思っております。私は文理学部を1964年に卒業（12回生物卒）、1968年文理学部改組に伴う理学部発足と同時に赴任し、2007年の定年退職まで学生時代も含めて43年の長きにわたり愛媛大学にお世話になりました。

この間、大街道を車が行き交い、石手川を越えると一面の田園の広がるのどかな時代から四国の中核都市への松山市の変遷を目の当たりにして参りました。同時に、愛媛大学文理学部も改組され理学部へ、さらに修士課程、続いて博士課程の設置と日本の経済情勢とも相まって著しい発展をしてきました。一方、1996年理学部に博士課程が設置されるまでは右肩上がりの感がありましたが、特に、2004年の国立大学法人化以後、財政のみならず少子化による大学全入時代など大学を取り巻く環境は年々厳しさを増しております。同窓会として、理学部がよりよい学問・研究の場になるよう、また、卒業生の就職活動においても側面から少しでも支援できればと願っております。

同窓会の今一つの目的は卒業生相互の親睦です。現在まで文理学部および理学部の卒業生は約7,000名に達しておりますが、唯一、東京支部が年一度懇親会を催しているのが現状です。各地に理学同窓会の拠点が出来ればと想いを馳せております。人間関係が疎遠になってきている時代でもあり、各地で理学同窓会支部が立ち上がることを期待しております。

以上の目的を達成するためには卒業生の相互連絡が重要になりますが、名簿管理が難しい時代になり、事務連絡も十分行き届かなくなりました。私共としても出来る限りの支援体制を構築していくよう心がけてゆきたいと考えております。住所変更が生じた場合には、是非、郵送またはメールにて事務局までご一報下さい。また、理学同窓会ホームページの内容、同窓会活動についてのご意見等も併せて連絡して頂けることを期待しております。

最後に、私自身同窓会長の任を全うするにはいささか力不足であると認識しております。皆様のご協力を得て微力ですが池田前会長および野田善郎先生の意志をつぎ、少しでも活力ある同窓会の発展に向けて努力したいと思いますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。同窓会員の皆様のみずますご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げ、会長就任のご挨拶といたします。

### 《目次》

会長就任のご挨拶	1	事務局だより	12
総会の報告	2	東京支部だより	13
講演会の概要	3	会則	14
新研究センターの紹介	3	白楊会館のご案内	15
母校の窓	4	埋蔵文化財調査室からのお知らせ	16
教室だより	9	会計報告	16
会員近況	12		

## 総会の報告

平成20年9月20日に本同窓会の総会を9年ぶりに理学部で開催しました。

まず総会に先立って、午後3時より、愛媛大学名誉教授 向井和男先生（元理学部化学科）に「抗加齢（アンチエイジング）とビタミン・サプリメント」と題して記念講演をしていただきました。向井先生には多くの同窓生が関心を持っている老化に関するテーマについて解りやすくお話しいただきました（講演の概要は3ページをご覧ください）。理学部の教職員の方も参加していただき約100名の聴衆でした。



引き続いて開催された総会では、まず池田逞前会長の議長の下で議事進行が行われました。これまでの活動報告の後に、会長代行をお願いしている城尾昌範氏《文理：生物 12回》を新会長に選出いたしました。また、監査として谷弘幸《理学：化学 12回》、桑原英了《理学：地球 5回》の両氏を選出しました。

次に議長を城尾新会長に代わり、会則の改定が審議され質問等の後、新会則が原案通り決定しました（新会則は14ページをご覧ください）。主な変更点は、1）会の正式名称について；従来は“愛媛大学文理学部理学科ならびに理学部同窓会”（略称“愛媛大学理学同窓会”）を使っていましたが、今後は“愛媛大学理学同窓会”が正式名称になりました。2）役員任期について；従来の会則には会長をはじめ役員任期の定めがありませんでしたが、新会則では任期は2年となりました。会長は総会で承認する事になっていますので、今後、2年に1度は総会を開催することになります。その後、会計報告、今後の同窓会の運営についての議論がなされた後、総会は終了しました。

また、総会終了後、会場を大学会館に移し17時40

分から開催された懇親会には約90名の出席がありました。懇親会は、城尾会長挨拶、野倉理学部長のご祝辞の後、東京から車で駆けつけられた文理・物理の第1回の卒業生である三好昭一先生の乾杯で始まり、その後、各学科代表のスピーチなどがあり、楽しく旧交を温めることができ、総会および懇親会は成功裏に終わりました。また、会終了後も同期生等で場所を移し盛り上がったとも聞いています。今回はどちらかと言うと昭和年代の卒業生が多かったのですが、次回は平成年代の卒業生も多数参加されることを期待します。



なお後日、会則の定めにより城尾会長が、顧問、副会長、幹事を下記の人に委嘱されました。今後2年間、このメンバーが中心になり理学同窓会を運営いたします。

〈顧問〉

野倉 嗣紀（理学部長）  
長谷川広武（理学部事務課長）

〈会長〉

城尾 昌範《文理：生物 12回》

〈副会長〉

一色 準《文理：数学 13回》  
東 長雄《文理：化学 18回》

〈幹事〉

遠山 鴻《文理：生物 16回》  
仲田 秀雄《文理：物理 20回》  
千葉 昇《理学：地球 1回》  
佐伯 雅弘《理学：数学 13回》  
二宮 啓二《理学：化学 14回》  
高田 裕美《理学：生物 16回》

〈監査〉

谷 弘幸《理学：化学 12回》  
桑原 英了《理学：地球 5回》



## 抗加齢（アンチエイジング）と ビタミン・サプリメント

愛媛大学名誉教授 向井 和男

理学同窓会会長の城尾昌範先生の依頼により、9月20日(土)に開催された理学同窓会の総会の前に、表題のようなタイトルで講演させて頂きました。同窓会の総会の開催は平成11年以来とのことで久し振りでしたが、私の予想を遥かに超える70数名の参加者があり、改めて旧制松山高等学校と文理学部を母体とする理学部の伝統を感じました。

ビタミンA, C, Eやユビキノン-10, ポリフェノール類などの抗酸化剤を含むサプリメントは世に溢れていますが、種々の広告やテレビ番組ではその効用の科学的根拠は殆ど述べられていません。私の専門が化学で、また、受講者が化学の基本が分かる理学部の出身者であることを考え、講演ではサプリメントの効用の基となる分子構造と活性の相関に関する基礎的な説明を行いました。夜の懇親会では、化学科の卒業生を始め、多くの卒業生の方々と楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

私が所属した化学科構造化学講座は、理学部が発足した1968年にスタートし、石津和彦先生を初代の教授とし、現在に至っています。その間、研究室からは約350名の学生諸君が卒業して行きました。昨年は、石津先生の叙勲と言う嬉しいニュースがあり、お祝いの会を開きました。その際分かったのですが、研究室の卒業生の内、女性4名を含む24名が

博士号を取得していました。これは、理学部の卒業生の優秀さと、卒業後の皆様の活躍の一端を示す嬉しい事実です。

ご存知のように、ここ数年間続いた好景気も、米国発の不況の波が押し寄せ、当分は学生達の就職戦線は厳しいものとなることが予想されます。私も現役時代には就職をお世話する機会が多かったのですが、その際、民間企業で活躍されている卒業生の人達に助けられたことが度々ありました。景気が良い時は問題ないのですが、不況の際に頼りになるのは、やはり多くの先輩が就職し、活躍している企業です。今後も卒業生諸君が種々の分野で活躍し、その結果として、現役学生の卒業後の道が開かれるという、良循環が続くことを願っています。

尚、私こと、理学部化学科を3年前に定年退職し、現在も民間企業などとの共同研究のために、理学部本館5階の研究室で研究を続けています。松山にお越しの際は気軽に声をお掛け下さい。



## 新研究センターの紹介

### 愛媛大学宇宙進化研究センター

宇宙進化研究センター長 谷口 義明

宇宙進化研究センターは2007年11月1日、愛媛大学の5番目の研究センターとして設立されました。その名の通り、宇宙の進化に関することを研究するための研究センターですが、次の3つの研究部門から成っています：

1. 宇宙大規模構造進化研究部門
2. ブラックホール進化研究部門
3. 宇宙プラズマ環境研究部門

人員構成は教授3、准教授2、助教2となっており、そのうちセンター専任は4名で、残り3名は理

学部物理学教室との兼任になっています。基本的には物理学教室とタイアップし、物理学科の教育の充実を図り、学生や大学院生の指導をしています。もちろん、宇宙進化研究センターは理学部とは別組織ですが、物理を学ぶ学生や大学院生から見ると、愛媛大学理学部物理学科に入学すると、

素粒子物理学

物性物理学

宇宙物理学

の3つの専攻科目を選べるという、大きなメリットがあります。物理学科でこれら3つの主要専攻科目がきちんと用意されている大学は、国内ではそれほど多くありません(欧米では多いですが)。したがって、バランスが取れた物理学科としての存在意義を持つようになったのではないかと思います。なんだか妙な話ですが、バランスが取れていることが、あ

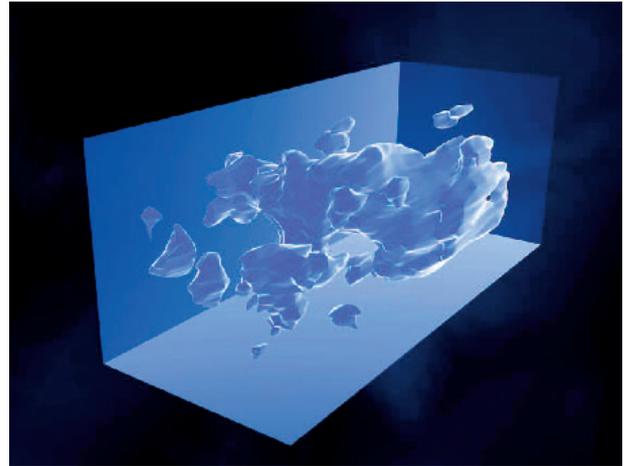
る意味では、非常に大きな特徴になっているわけです。

研究面では、3つの研究部門がそれぞれ国際的に十分認知される先端研究を行ってきており、日本の宇宙物理学シーンの中でも、特筆すべき研究拠点の一つになっていると自負しております。ご承知のとおり、21世紀に入り、私たちの住む宇宙の姿がどんどん解明され、宇宙の年齢も約137億歳であることがわかりました。その一方で、この宇宙は、私たちの知っている原子物質ではなく、未知の暗黒物質に操られて進化してきていることがわかりました。さらには暗黒エネルギーと呼ばれる正体不明の斥力によって、宇宙が加速膨張していることもわかりつつあります。探求すればするほど、宇宙進化の謎に突き当たるかのごとくです。

このような状況の中で、宇宙進化研究センターでは、できるだけ基本的なスタンスで進化する宇宙の姿を調べ尽くすことが肝要と考えて、総合的な研究展開をしていくつもりです。それと同時に、次代を担う学生や大学院生にとって優れた教育環境を提供し、宇宙物理学教育の拠点としても機能するように心がけていきたいと思っております。今後とも、皆様のご

支援を宜しくお願いいたします。

この図は、宇宙進化サーベイ (COSMOS) プロジェクトで得られた、宇宙における暗黒物質の空間分布です。私たちはこの図の左側から宇宙を観測しており、奥行き80億光年彼方まで見通しています(80億光年先で2.4億光年×2.4億光年の大きさに相当しています)。これら暗黒物質の塊の中で、銀河が育まれてきたこととなります。なお、COSMOS プロジェクトには谷口が参加しています。



## 母 校 の 窓

母校、愛媛大学理学部では平成19年度末に物理学教室の江沢康生教授、菅谷礼爾教授、化学教室の小野昇教授、樋高義昭教授が退任されました。また、平成20年3月末に物理学教室の井上直樹教授、本会

副会長で化学教室の東長雄教授、本会の顧問としてお世話になった長谷川広武事務課長が定年を迎えられます。皆様方からメッセージを戴きました。

## 思 い 出 な ど

江 沢 康 生

私が着任したのは、有名な松山商業と三沢高校の決勝戦があった、昭和44年でした。当時は宿直室があり、そのテレビは予選のときから松山商業の試合のときは、多くの人が集まりました。秋になると愛媛大学にもいわゆる大学紛争が伝わってきました。事務局が、翌春には法文館が占拠されたことをご記憶の方も多と思います。私たちも学生と泊まり込んだり、教養部講義棟などの出入りに待機したりして、警戒に当たりました。

間もなく、紛争は終わり、文理改組後の教育・研究が軌道に乗るようになりました。授業では演習をいくつか担当していましたので、大抵の学生の顔と名前が一致し、よく付き合いました。中でも、昭和49年に3回生と新歓ソフトボール大会に参加し、出

場98チーム(メンバーの1人が覚えていました)で準優勝したのが記憶に残っています。その後、昭和53年に教養部に移りましたが、理学部のときとは逆に講義ばかりで受講生も約50人と多く対象の学科も大抵毎年変わりました。顔と名前が一致するのは高々7割台といったところでした。

その後、平成に入り、教養部の改組が近づく頃から、理学部の学生の卒論、修論の指導を非公式ながら担当し、改組に備えました。改組後は、もちろん公式に指導を担当しましたが、そのころの研究テーマは後述のようにすでに重力理論・宇宙物理に移っていました。これらのテーマに興味を持つ学生は優秀で、修論にわずかに手を入れれば、journal版になりました。

研究は、紛争後、素粒子論研究者でグループを作りました。このグループは様々な変遷をたどりましたが、私は素粒子の統一理論との関連で、宇宙物理にも興味を持つようになりました。宇宙の主要な力はもちろん重力で一般相対論で記述されてきました

が、近年では、弦理論の影響もあり、その一般化に興味を持たれています。また時空も5次元以上の場合が研究の対象になっています。そういうわけで、近頃は「多次元高階重力理論」の理論構造やその応用を研究テーマにしています。



## 愛媛大学での思い出

菅谷 礼爾

大学院を修了後、愛媛大学理学部の電磁物理学研究室の助手として松山市にきました。故野本尚敬教授の放電物理学の研究室で、私の専門のプラズマ物理学と近い分野です。放電物理学の実験装置はありましたが、プラズマ物理学の実験装置は皆無でしたので殆どゼロからの出発でした。幸い核融合の研究に多くの研究予算が配分された時期でしたので、2～3年で実験装置を作ることが出来て何とか研究を始められました。実験による研究を10年程続けた後、観測された現象を説明する理論を発展させる事が出来、理論的研究に徐々にシフトしてゆき現在に至っています。この当時、名古屋大学のプラズマ研究所（現在の核融合科学研究所）の大型計算機が無料で使用出来たので理論的研究を進展させられました。又、愛媛大学の計算機センター（現在のメディアセンター）を利用して頂き感謝しております。

磁化プラズマ中の非線形波動現象の研究で、空芯磁場コイルによる強い磁場中に真空装置を置きその中にプラズマを作って実験を行います。卒業研究や院生の特別研究でのこの実験や計算機による理論研究においてはとても活気があり多くの思い出があります。実験やゼミの終了後、研究室で酒を飲みに行くなど研究以外でも活気があったと思います。この中の思い出の1つが大山スキー場に行った事です。

1977年度の卒業研究では5名の卒論生を私と須川先生で指導しプラズマ実験を精力的に行いましたが、それ以外にスキーというスポーツの指導も行いました。休日を利用して、美川スキー場や鳥取県の大山スキー場に民宿宿泊で行きましたが、私と須川先生と他研究室の1名の4回生以外全員スキーが初めての経験です。不思議な事に教官による理論指導

のお蔭で短期間で全員スキーが上達し、1名の学生は私よりも上手になったのには驚きました。私のスキーの資格が2級ですので1級のレベルに達した事になります。1級はスキーの指導員になれる資格です。大山のスキー場には私と卒論生が運転する乗用車2台で行き、スキー場の駐車場に乗用車を置いてゲレンデのすぐ近くの斜面にある民宿に宿泊しました。私は先頭の乗用車に後れないように懸命に運転した記憶があります。帰る時に大雪のため乗用車は1m以上の積雪に完全に埋まり、「松山に帰れない」、「明日の授業に間に合わない」とパニック状態になりましたが、全員で除雪を行い何とか出発できる状態にしました。しかし、私の乗用車のバッテリーが低温で使用不能になりエンジンが始動できません。近くのガソリンスタンドで新品のバッテリーに取り替えてやっと出発に至りました。大山から米子市に向かって出発したとたんに、タイヤにチェーンを取り付けているにもかかわらず今度は乗用車のスリップが起り、私が先頭で運転する事になりました。私は雪国生まれなので雪道の運転はよく分かります。このようにして翌日の授業に間に合い、卒論生の授業に対する真剣な態度は、「教官にスキーで勝った、野球で勝った、車の運転で勝った」と言っていた事や、大山の頂上から見える日本海の景色と共に忘れられない思い出です。その後も大山スキー場に何回か行きましたが2度と乗用車では行きませんでした。夜行列車で行って同じ民宿宿泊です。

この時から30年の歳月が過ぎましたが、それぞれ社会で活躍している事と思います。教育研究と公私共に充実した38年を過ごさせていただいた愛媛大学と卒業生に感謝しています。

## 松山で過ごした18年

小野 昇

平成2年4月から、18年の間、愛媛大学理学部で有機化学の教育・研究に従事し、平成20年3月31日に無事に定年で退職しました。学生、教員、職員、近所の飲食店で会った人達の温かさに助けられて、楽しい18年が送れたことを感謝しています。この18

年での一番の思い出は、非常に多くの学生を指導して、社会に送り出したことです。有機系の先生と学生とが、3月9日に最終講義と記念の同窓会を開催してくれましたが、在校生も含めると150人を超す人が集まって、私の定年を祝ってくれました。その



講演会後の小野先生(左)と河野先生

とき、愛媛大学で18年を過ごせた幸せを実感しました。

愛媛大学に赴任するまでは、研究が中心の生活でしたが、松山に来て以後は、この町ののんびりした空気にそまり、多くの学生とのんびりと研究を楽しみました。しかし、この環境の中で、ここでしかできない研究をしようと秘めた野望ももっていまし

た。私の専門は有機合成です。有機合成が対象とする研究課題は多彩です。例えば、医薬品の製造では、生理活性物質を見つけ、その候補の分子を効率よく合成するためには、有機合成が重要です。私は松山に来るまでは、このような有機合成の手法の開発研究をしていました。松山では、有機分子の電子機能の開発研究をしました。通常は絶縁体の有機分子が半導体や導電体に変化することにロマンを感じました。定年間際になって、真空を使わないでフタロシアニンのような顔料の薄膜を塗布で作成することに成功しました。この技術を応用すると大面積の有機薄膜太陽電池の製造とか有機EL素子のインクジェットを利用した作成などが可能になります。実際、これらの試験的な試みは、三菱化学の研究所で成功していますが、これらが商品化されるころには、きっと私はこの世にいないでしょう。幸いにも、もう少しだけこの研究に関わることができることになりましたので、時々松山に来ます。そして、道後の湯につかったあと鰯の刺身とビールを楽しむ予定です。

京都に住んでいますので、卒業生の皆さん京都に来る機会がありましたら訪ねて来てください。

## 燃焼反応経路を求めて37年

樋高義昭

博士課程3年生の5月で退学し、昭和46年6月、愛媛大学理学部助手に採用頂き、37年目を迎えた昨年3月31日に退職いたしました。思い出して見ますと、昭和46年4月、須賀先生(当時愛媛大学理学部化学科教授)より、私の恩師である山村先生に、“燃焼反応と一緒に研究出来る者を探している”との電話があったそうで、先生に勧められ、愛媛大学を訪問・見学しました。これを機に、37年間、理学部で過ごす事となりました。

その当時、衝撃波管は気相高温反応の研究にとって理想的な反応測定装置と云われ、日本のいろんな研究機関で導入を計画されていましたが、衝撃波管装置一式を外注すると1千万円近くの費用が必要と云われ、簡単に導入出来る時代ではありませんでした。しかし、須賀先生の計らいで、衝撃波管装置を使用する燃焼研究を始める事になり、赴任と同時に設計と材料探しに明け暮れる毎日を過ごしました。須賀先生の人脈の広さと私の愛用車、ホンダ“N360”の行動力で、昭和48年には衝撃波管装置の第一基目をほぼ完成することができ、最初に手掛けた研究が、エチレンの燃焼反応特性の研究であります。更に、運のいいことに、十数年に一度回ってくる理学部の特別予算で、四重極質量分析計を高温高速反応の研究に応用する研究(二基目の衝撃波管装置)を始める事ができ、1974年には日本では初めてそれに成功する事ができました。

その後、その装置を炭化水素の燃焼反応研究に応

用し、他の方法では測定困難な、酸素分子の高速時間挙動を明らかにする事も出来ましたし、この装置の開発・成功は、化石燃料を含むCH化合物燃料の燃焼反応の基礎である、アセチレン燃焼反応機構構築(1996年に正逆反応を合わせて、約206個の素反応からなる反応機構を発表)の根幹をなす結果ともなりました。

昭和53年には、これら一連の研究が認められ、新制の大学教官としては、初めて、吉田科学技術財団の助成を受け、渡米する機会を得ました。当時の高温反応機構の世界的研究者である、米国、テキサス大学オースチン校のガーディナー教授のもとで1年半、低級炭化水素であるC1、C2炭化水素(メタン、エタン、エチレン、アセチレン)の研究を行い、



世界の他の研究室に先駆け、CH 化合物燃料（化石燃料を含む）の基礎となるC 1, C 2炭化水素の燃焼反応機構を発表することが出来ました。このテキサス大学オースチン校での研究を通して、高温反応機構の計算手法を学び、その後の燃焼反応機構研究の発展の基礎を作ることが出来ました。

帰国後、相次いで燃焼反応機構の懸案であったホルムアルデヒド、ケテン、アセチレン、エチレン、エタン、メタンの研究を手掛ける事ができました。本研究室で開発作製した3基の特色ある衝撃波管

と、コンピュータを駆使し、独自の燃焼反応機構研究システムを用いて、系統的に、C 8までの炭化水素燃料、更にエーテル、アルコール、フロン類等を研究する事ができました。

地方大学では、無理と云われた研究を37年間と云う長きに渡り続けてこれましたのは、ひとえに須賀先生を始めとする先輩の先生方、愛媛大学文学部・理学部の卒業生の皆様のお蔭と深く感謝いたしております。この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

## “定年となります” その随想

井上直樹

思えば長く教員生活をいたしました。大学、大学院を修了して大学の付置研究所に採用され、そこで約10年、その後愛大27年です。付置研時代は、学生、院生も少なく研究室は静かでしたが、愛大に赴任したときはまことに新鮮でありました。大学内は若さが溢れ、サークル活動の音が響き、教室は活気に満ちていました。赴任してまもなく御幸会館の大広間でたてコンがあり、そのにぎわいと親密さには感動しました。物理学科の大集団でした。ここにいる学生達もいろいろな思いで、物理学を専攻しているのだろうなという思いで酒を飲んでいましたが、ふと自分はどうかだったのかと振り返っていました。最初に科学に興味を覚えたのは、小学生のときに父親が連れて行ってくれた研究所の見学でした。いまでもその感動を思い出しますが、その後は、数式があり、論理的に考えるところなどがおもしろそうに物理を選びました。最近、理学部でも科学大好き子供達を集めた親子で楽しむ科学実験を開いていますが、私も少しお世話しましたが、子供への影響は大きく、これは大切な催し物と思います。私は10~20代のころは科学にしか興味がありませんでした。政治や経済、芸術などの分野は、今は大変おもしろいと思っています。一度、きちんと本を読んで、法律や経済、哲学などを専攻した友人と、なぜ若くしてそのような分野を選んだのかなど、一度ゆっくりと酒でも飲みながら話してみたいと思っています。

大学の教員をしてよかったなと思うことを三つほどあげてみます。やはり学生を世に送り出すことができた。これが一番です。卒業後に再会したときなどは、その成長ぶりを目の当たりにしますと感動です。二番目は、いや限りなく一番に近いですが、学生、院生と共に研究できたことです。成果を学生達と学会で発表したり、国際会議にでかけたりしますと我々の意欲が上がります。国内外に友人もできました。これらはまことにすばらしい。平成18年度から理学部卒論発表会を公開でできるようになったことも、よいことです。三つ目は夢を持ち続けることができたことです。若い学生達と毎日接しているからでしょうか、先生は元気だとよく言われました。

かなり前ですが、ある学生が“大学の先生みたいになりたい”と言ってきました。どうして?“先生方の顔をみていると、いつも夢をもちながら歩んでいる姿がいい”でした。“夢”！ いい響きですね。確かに大学での研究は果てしない夢を追いかけたい面があります。改めてこの気持ちをいつも忘れないうようにしてきました。



このごろの大学は、いろいろと忙しく、大変窮屈になってきました。諸般の事情で、このようになっているのは十分理解できます。しかし、大学に効率一辺倒はなじまない。教育や基礎研究は時間がかかります。律することは必要だけれども、自由で夢のある大学でありたいものです。最近デジタル化も進み電子メールは便利だけれど、なんだか味気ない。意思の疎通もあまりよくない。形式的になり人間性にも影響しているように見えます。もっと感性が豊かになるようなアナログの部分がほしいものです。実験なんぞ見てみましても、装置が故障するとデジタルの部分は手の出しようがない。その点、物理の基本となる手作りに近い実験装置は、テスターとシンクロスコープ、機械の異常音、目視、ハンダ付け、機械工作などで直せますので、快適です。まさにアナログの世界バンザイです。理学部には10年ほど前までは、テニスコートや卓球台があり、多くの教職員と学生で忙しい合間をぬっては運動してい

ました。みんなが健康的でよかった。今のキャンパスにも何らかの運動施設やベンチなどで休憩できる小公園、もっと牧歌的な雰囲気がほしいですね。

昭和57年からお世話できた卒論生、大学院生の総数は数えてみますと114名にもなりました。学生達の研究は、キーワードでいいますと、超音波緩和、ブリルアン散乱、レーザーブラッグ反射、分子振動緩和、臨界現象、ナトリウムイオン伝導、混合アルカリ効果、リチウムイオン伝導、非アレニウス型イオン伝導、微粒子分散、電子状態など多数にのぼります。この間、アメリカで1年、ドイツで2ヶ月研究もさせてもらいました。教育では講義はもちろん

ですが、研究室ゼミナールが楽しかった。その他、ソフトボール大会、テニス大会、ボウリング大会、バーベキュー、花見、飲み会などなど質素だけれど充実したものでした。これらのことができたのも共に歩んだ学生達のおかげです。この場を借りまして卒業生みなさんにお礼を申し上げます。今後は、残りの研究データの整理と計算、共同研究および国際学術誌のエディタをもう少し続ける予定です。写真は今年度最後の卒論生、修論生および私です。

最後に、卒業生皆様の今後のご健勝とご活躍、また理学部および理学同窓会の発展を願いまして終わりにしたいと思います。

## 計算尺からパソコンへ

東 長 雄

昭和41年、私は愛媛大学文理学部理学科に入学しました。鉄鋼メーカーに5年近く勤めた後の入学でしたので、角帽を購入するなど、当時の大学生のトレンドからワンテンポ遅れていた記憶があります。学部卒業後の大学院生活では愛媛大学を離れましたが、博士課程修了と同時に旧教養部に赴任し、以来愛媛大学を離れることなく、34年間教員を続けさせて頂き、来る3月末で定年退職となります。その間にお世話になった方々にまず御礼を申し上げ、ご迷惑をお掛けした方々に心からお詫びを申し上げます。

学部での思い出の持ち物に計算尺があります。化学計算用と使用目的は限られていました。有効桁数に不足はないものの、位取りは暗算で行わねばならず、その点では不便でした。しかし、お蔭で概算練習を毎回していたことになります。

大学院に進学して紙テープ入力式、その後、紙カード入力式の電子計算機及び電卓の使用により位取りが不要となり、概算が下手になったと思います。パソコンに至っては、計算よりも文書作成に多く使うようになり、楽ができました。しかし、読めても

漢字を書けない、送り仮名を多く間違う、入力に慎重さを欠くなど、高能率・便利さと引き替えに失ったものも多いと感じています。

効率と能率は似て非なるものと思います。単純に云えば、効率は仕事量(成果)と投入エネルギー(資材)の比です。効率が悪ければ社会及び自然環境への負荷を大きくします。効率的行動とは、合理的な行動と云えましょう。能率は仕事量と所要時間の比です。ことさらに能率を追求すれば、効率が低下する可能性が大です。有限の寿命しか持たないヒトにとって、効率と能率のバランスこそが肝要であることは云うまでもないことです。

過度な利益及び利便性の追求とは「効率にではなく能率に重点を置き過ぎる」考え方ではないでしょうか。生存の必須条件である食糧生産すら国際的な分業体制でよしとする考えは、その線上にあると云えないでしょうか。人類の稲作の開闢は小麦とほぼ同時期の6千年昔に遡り、日本での稲作も2~3千年前に始まったとされます。既に数千回も主要穀物の生産が更新・継続されてきました。日本は資源小国とよく云われますが、その資源とは耐用年数が2百年にも満たない更新性ゼロの地下資源を主として指しています。更新可能な資源である農林水産資源及び(資源といえば語弊がありますが)人的資源をもっともっと大切にする国であって欲しいと願います。

人的資源育成を目的とする本学で40年近くを過ごせたことは、本当に有り難いことと思います。しかし、効率ではなく能率を追求し過ぎてきた我を思う近頃でもあります。せめて退職後は、効率に重点を置く、むしろスローテンポな生活をと想う今日この頃です。

最後になりましたが、理学同窓会員の皆様方のご健勝を心よりお祈り申し上げます。



## 退職に際しての感想等

長谷川 広 武

私は、今年度で愛媛大学を定年退職することになりますが、遠山先生から理学同窓会報（第6号）を発行するので退職に当たり、何か原稿を書いてほしいとの依頼を受けました。私自身、同窓会の会員でなかったため、少し躊躇しましたが、「退職に際しての感想等」で良いということでしたので、普段から思っていることや感じていることなどを書かせていただきました。

「子年」生まれの私は、今年で5巡目の年男となり、還暦を迎えました。気持ちはいつまでも若いつもりでしたが、身体の方は確実に年を取っているようです。以前は、体を動かすことが好きで、いろいろなスポーツをしてきましたが、10数年前から頑固な腰痛に悩まされ、長い間、体を動かすのに不自由を感じておりました。でも、この年になると今の身体に対し、良く動いているなあと、感謝の気持ちを持てるようになりました。あるできごとから、歩ける間にできるだけ歩こうと決心して、3年前から毎朝4キロ程度を「日々新たに」と「感謝」の気持ちを持ちながら歩いています。今では、松山から東京間を十分往復できる距離まで歩き続けることができます。

話は変わりますが、国立大学は、平成16年度から、百年に一度あるかないかの大改革と言われている独立法人化の制度が導入されました。今の時代にあっては、避けて通ることのできないことかもしれませんが、市場原理が取り入れられたこの制度は、基礎科学を対象とする分野にとって大変厳しいものとなっています。近い将来、この制度が大幅に修正されなければ、本当に大切な分野が衰退し、我が国は没落していくように思います。

また、今の日本は、成果のみが重視され、結果よ

ければ全てよしとの感が強く、プロセスを大切にされないことや地道に努力をする者が格好悪いものとして軽んじられる傾向にあります。これらのことが、現在の閉塞感や行き詰まり感を強くしている大きな原因ではないかと思えます。このような中であって、基礎基本を重視し、土台のしっかりした、奥行きがあり、応用力のある人材の育成を目的としている理学教育は、将来、社会の流れを大きく変えていく力を持っているように感じます。

それから、今年は本当に嬉しいことがありました。日本人がノーベル賞を4人も受賞し、それも全て基礎分野の科学者でした。これを契機に、この分野の重要性が早く再認識されることを期待しております。

とりとめのないことを書きましたが、基礎分野がますます発展することを心待ちにしている者の一人です。



## 教室だより

### 【数学教室】

同窓会の皆様には各分野でご活躍のことと存じます。前回の同窓会報から1年半がたちました。恒例により、まず数学教室の人事についてご報告致します。

平成19年10月に谷口隆先生、赤堀公史先生が助教として着任されました。平成20年3月末には、坂口茂先生が広島大学へ転出されました。後任には、現

在神戸大学に在籍の内藤雄基先生が平成21年4月に着任予定です。平成20年4月には、成蹊大学より平野幹先生が着任されました。平成20年9月には、谷口隆先生が神戸大学に転出され、後任として山崎義徳先生が助教として着任されました。平成21年3月には、木曾和啓先生がご退職される予定です。現在、後任の公募を行っています。（以上、平成20年12月現在の情報です。）筆者（土屋）の学科長の任期も2年目になりましたが、なぜか私の任期中に人事案件が続きました。現在公募中の人事を含めると、6人の方の人事を担当することになりました。前回も書きましたが、このような活発な人事異動は、当数学教室の構成員の教育・研究活動が活発であること

の現れでないかと思えます。なお、現在の数学教室の構成員の研究・教育活動の詳細については、数学教室のホームページ <http://www.math.sci.ehime-u.ac.jp> をご覧下さい。

次に、今年の卒業予定者の就職状況についてご報告致します。皆様もご存じのように2008年後半にかけて、日本を取り巻く経済状況は急速に悪化しておりますが、学生の就職活動はほぼ夏休み前までに終わっていますので、就職状況には今年度はそれほど影響が出ていないようです。また、内定取消しなどは、少なくとも私が知る限りではありません。しかし、来年度以降就職の状況がどうなるかは予測不可能で、3回生以下の学生には不安が広がっているようです。

この状況を反映しているのか、大学院へ進学を希望する学生が増えています。現在、愛媛大学理工学研究科数理解物質科学専攻数理科学コースの定員は14名です。これまで、定員を充足することがなかなかできなかったのですが、今年度は修士1年生が14名入学しました（1名が海外留学のため休学していますが）。来年度4月入学の修士1年生も14名以上となり、2年連続で定員を充足する予定です。行き先の予測がつかない不透明な時代ですが、最後に頼りになるのは若いときに身につけた（広い意味での）学力だと思います。学生が、愛媛大学で学んだ事を基礎にして、自分の力で未来を切り開いて行けるよう、我々も教育に力を入れなければならないと思います。

末筆ながら、皆様のますますのご発展とご健康をお祈り申し上げます。（土屋 記）

### 【物理学教室】

卒業生の皆様には、ますますのご健勝のことと思えます。

私は物理学科長の宗と申します。私自身、愛媛大学に着任したばかりで、前回の同窓会の会報では、新戦力の一人と記述されております。文字通り、右も左もわからないまま、日々、教育および研究以外に学科長の仕事に明け暮れております。

さて、今年度は若い新戦力（長尾透氏）を迎えました。また、物理学科から分かれた形の宇宙進化研究センターも、工学部から教員3名（鶴飼正行氏、清水徹氏、近藤光志氏）を迎えて宇宙プラズマ環境研究部門を構成しており、更なる充実を目指しています。

大学では、毎年々々新しい若者が新入生としてキャンパスを賑やかにしてくれます。それが同時に我々教員の励みにもなるわけですが、彼らを育成してきた環境は年毎に違うわけで、その受け皿とし

ての大学の、そして学科の対応を迫られています。つまりカリキュラムの変更です。今は、少し長期的な展望に立ってのカリキュラムの構成を検討中です。こういう努力はすぐには報われませんが、しばらくして成果が現れてくればとの思いです。

最後は私の感想でしたが、物理学科の近況をお伝えできましたでしょうか。（宗 記）

### 【化学教室】

前回の同窓会報（平成19年9月）以降の化学教室の様子をお知らせいたします。

平成20年3月に小野先生と樋高先生が定年退職されました。同4月から物理化学系に坂口先生が教授として着任され、「ナノ科学研究室」を立ち上げ一個の分子を組み立て、微細な分子素子を作る研究を開始されました。無機化学系では山田（幾也）先生が助教として着任され、高橋教授とグループを組んで無機新規物質の合成と物性評価を進めておられます。構造化学系では本学修士課程を修了されたのち他大学で博士号を取得された垣内先生が助教として着任され、長岡先生、小原先生とグループを組んで内殻電子励起過程の研究のための分光装置の開発などを進めておられます。無細胞生命科学工学研究センターの西山先生が転出され、後任として杉浦先生が准教授として着任されました。光エネルギーの化学エネルギーへの変換過程の研究を進めておられますが、西山先生と同じく化学科の教育に携わって頂くことになりました。なお、有機化学の小野先生の後任人事については、総合科学支援センター教授の宇野先生が平成21年4月から配置換えで着任されることが教授会で承認されております。化学科では現在も2件の人事が進行中です。優れた人材を迎え、教育研究をさらに活性化するために教室員一丸となって努力してゆく所存です。（真鍋 記）

### 【生物学教室】

寒さ厳しき折、理学同窓生の皆様におかれましては、ますますご清祥のことと存じます。先の理学同窓会報（第5号）が発刊されて、1年余りが経過しました。この間生物学科では、教員の着任、退任はありませんでしたが、昨年11月から、沿岸環境科学研究センターの高橋真先生（ご専門は生態環境化学）を生物教室の新しいメンバーとしてお迎えしました。また12月1日、動物生理学研究室の加納正道先生が教授に昇任されました。そして、つい先日行われた学長選挙の結果、生態学研究室の柳澤康信先

生が平成21年4月から愛媛大学の学長となられます。これからの活躍を期待したいと思います。

今年度の学部学生、及び大学院生の就職状況はまずまずのようです。しかし、採用にあたって企業が慎重になっているためか、年々就職活動の期間が長くなっているような感じを受けます。これは、我々教員にとって卒論の指導が困難になるなどの弊害をもたらしていますが、何より学生の皆さんの心理的負担が大きくなっていることが懸念されます。さらに、昨今の経済状況の悪化は、来年度以降の就職状況をより困難なものにするのではないかと危惧しております。学生の就職につきまして、卒業生の皆様の一層のご協力が頂ければ、幸甚に存じます。

なお、昨年1月、永年発生学研究室に在籍され、退官後は理学同窓会の会長代行を務められた野田善郎先生が、6月には中島臨海実験所の所長を務められた二階堂要先生が亡くなりました。ご冥福をお祈り致します。最後になりましたが、今後の皆様の益々のご発展を祈念致します。(小南 記)

### 【地球科学教室】

厳しい寒さが続いておりますが、卒業生の皆様にはお元気でご活躍のことと存じます。さて前回の同窓会報(平成19年9月)以降、1年あまりが経過しましたので、この間の地球科学科の近況をお知らせ致します。まず人事関係ですが、若干の教員の異動がありました。長年、地球科学科において教育に携わってこられた沿岸環境科学研究センター(CMES)の奈良正和先生が平成20年10月1日付けで高知大学の准教授として転出されました。今後のご活躍を大いに期待したいと思います。なお、その助教ポストはCMESから地球科学科に配置変更され、現在、公募中です。一昨年、早稲田大学に転出した井内美郎教授の後任として、九州大学より磯辺篤彦先生がCMESの教授として平成20年4月に着任されました。これに伴い、平成20年度からはCMESの郭新宇准教授とともに、地球科学科の海洋物理学分野の教育に本格的に携わっていただくことになりました。一方、地球科学科長、理学部長、学長を歴任し、それぞれの運営に尽力されてこれ

た小松正幸先生が平成21年3月をもって退任されることとなりました。地球科学科のメンバーから見ると寂しい気持ちですが、小松学長のますますのご発展を期待したいと思います。

次に、今年度の学部生、院生の就職状況は、内定の取消しなど、昨今の企業側の不況対策にもかかわらず、比較的、良い状況が続いておりますが、来年度以降の就職状況は不透明な現状となっております。一方、この反面、大学院生の入学定員確保が難しくなりつつあるという傾向が生じています。これは大学院生のみならず、学部生の定員確保も同様の状況です。このような学生の入学・進学や就職に関する諸問題につきましては、今後も、卒業生の皆様方の、より一層のご協力を頂戴できれば幸甚に存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、うれしい報告をさせていただきます。世界最高水準の研究基盤の下で国際的に卓越した教育研究拠点の形成をめざすグローバルCOEプログラムのことは皆様もご存じのことと思います。平成20年6月、このグローバルCOEプログラムに対して、地球科学科の教育に協力していただいている地球深部ダイナミクス研究センター(GRC)から申請したプログラム(『先進的実験と理論による地球深部物質学拠点』)が見事、採択されました。地球惑星科学の分野で選ばれたのは3大学のみ(愛媛大学、神戸大学、東北大学)という難関でした。このプロジェクトでは、入船徹男教授(拠点リーダー)をはじめとするGRC教員、および、大野一郎教授、川崎智佑教授、筆者(山本)の3名の地球科学科教員が参加しており、今後、研究・教育を積極的に推進して国際競争力のある大学づくりを行う予定です。さらにこれにあわせて、来年度(平成21年度)後期から理工学研究科の中に、博士後期課程のみからなる『地球深部物質学特別コース』を立ち上げることが決まりました。これらの新しい動きは、愛媛大学はもとより、地球科学科をも活性化させるものとして大いに期待しているところです。卒業生の皆様からのご支援をよろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、卒業生の皆様方のますますのご発展およびご健康をお祈り申し上げます。(山本 記)

## 会 員 近 況

### 森 浩介

(地球科学科 昭和59年卒業, 理学研究科地球科学専攻 昭和61年修了)

理学部の学び舎を離れて、はや22年が経とうとしています。地球科学という学問に惹かれて、大学院を含め、私は理学部で6年もの間、青春の時を過ごさせていただきました。今思えば、下宿して道後温泉を銭湯にしていたなんて贅沢の極みですね。何より研究室で、夜更けまで、何物にも捉われない自由な発想と努力に明け暮れることができた研究生活がとて懐かしいです。時に仲間と議論を交わし、与太話で盛り上がった。しかし、私にとっての地球科学は、そこで終わってしまいました。

卒業後の私は、地球科学いやおよそ理学部とは程遠い仕事をするようになります。CSK という IT 企業に入社し、当初は SE であったのですが、何故か経営に目覚めて、早稲田大学ビジネススクールを受験し、運良く合格してしまったことで人生が一変してしまいました。その後は、経営スタッフとして、企業のトップクラスの参謀役を務めたり、新事業や合弁会社の立ち上げ等、経営企画・管理の仕事がずっと歩んできました。現在は自ら、(株)ユアプラン・アシストという会社を設立・経営し、お客様の企画書、提案書作成のご支援や社員・組織の目標実現のための様々なビジネスサポート (コンサルティング, 教育研修, コーチング) 事業を手掛けています。まだまだヒヨっ子でヨチヨチ歩きの会社で不安も多々よぎるのですが、何故か落ち着いて、懐かしいような気分になることがあります。少し考えてみると、サラリーマンを辞めたことで、あの研究室時代の自由で何物にも捉われない自由な発想と努力に打ち込めるという環境をまた手に入れていたことに気づくのです。もう一度、自分がやりたいことに一途になって取り組んでみる。もうあの頃のように若く

はないですが、気持ちは万年青年のつもり。そして、ビジネスマンとしての第4コーナーを悔いなく駆け抜けていきたい！ そう思っている今日この頃の私なのです。

### 新川 理絵

(物質理学科化学系 平成20年度卒業)

「物質理学科」とは化学科と物理学科が統合され、化学と物理を学ぶ学科でしたが、今年度で物質理学科の最後の卒業生となり、次年度からは化学科と物理学科と、独立した学科になります。

物質理学科では、1回生では化学と物理の基礎知識を学び、2回生以降、化学系と物理系に所属して専門的な講義を受けていきました。実験も同様に始まりました。4回生で自分の希望する研究室にそれぞれ配属され、担当教員の指導のもと、1年を通し研究を行いました。

また、化学系には大学生活での人間関係を築き上げる場の1つとして「愛媛大学化学親交会 (略して愛化会)」という学生と先生方で作られている親交会があり、「愛化会」の活動により、他学科とは一味違う化学系独自の縦、横のつながりと、親睦を深めています。

大学生活では楽しい事も辛い事もいっぱいありました。人生の中で1番、自分の時間を持てる時だとも思います。この時をどう過ごすかは自分次第ですが、意欲を持っていろんな事にチャレンジし、いろんな事を考え、感じることで、将来の自分の糧になると思いました。

これからも「愛化会」の新生歓迎パーティーが盛況であることを願っています。

“事務局だより” にありますように本欄 “会員近況” の原稿を募集しています。ふるって投稿くださるようお願いいたします。

## 事 務 局 だ よ り

本部事務局より報告及びお願いを致します。

### 1. 野田会長のご逝去

会長 (代行) として理学同窓会の舵取りをしていたいただいていた野田善郎先生が昨年1月13日に心不全で急逝されました。ご逝去は突然で、3日前には理学部の同窓会室で、総会の開催等の今後の同窓会運営について2時間ほどご相談したところでした。そ

の時はお元気で、これから正円寺のご自宅まで自転車で帰るといわれていました。野田先生は前の池田暉会長時代から、副会長として同窓会の事務局的な仕事を一手に引き受けられておられました。一昨年5月、池田会長の辞任の後を受けて会長 (代行) に就任され、理学同窓会の活性化に取り組んでおられた矢先の突然の訃報でした。謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。

### 2. 総会開催の準備

平成20年2月23日に第3回目の理学同窓会の役員

会を開きました。会は新たに幹事を委嘱した城尾昌範氏（文理12回，生物），二宮啓二氏（理学14回，化学）が加わり，顧問をお願いしている野倉嗣紀理学部長，長谷川広武理学部事務課長にも出席をお願いいたしました。主な議題は(1)会長の選任，(2)総会・懇親会の開催，(3)同窓会規約の改正についてです。これらについて協議の結果，次のように決まりました。

- 1) 会長を城尾昌範氏をお願いすることになりました。会長挨拶にもあるように城尾先生は永い間理学部に勤務され，平成19年3月に退職され，現在愛媛大学名誉教授です。なお，規約では会長は総会で互選されることになっているため，当面は城尾昌範会長代行として同窓会の運営に当たることになりました。
- 2) 総会は平成11年11月に開催されて以来開かれていません。そこで，総会を次年度（平成20年度）開催いたすべく協議して，総会と懇親会を9月20日(土)，愛媛大学内で開催することが決まりました。

その後，平成20年6月21日(土)と8月25日(月)に役員会及び総会開催準備会を開きました。その結果，総会当日は，記念講演会を行うことになりました。また，総会の主な議題は1) 新会長選出，2) 会則の改定 に決まりました。

総会開催の案内を7月15日に連絡先の判明している正会員約3,900名に発送し，約850名の同窓生から返信があり，130通が宛先不明で返送されました。同時に理学部関係の現職の先生方，退職された先生方に懇親会へ招待のご案内をいたしました。その結果，総会等に出席の人は合計で約100名でした。総会前は，台風13号の進路が心配されましたが，前日に四国沖を通り過ぎました。当日は多少の時間の遅れは有りましたが，予定通り進行することが出来ました。役員をはじめ同窓生の皆様のご協力を感謝します。



## 東京支部だより

今年度の理学同窓会東京支部総会は平成20年10月18日(土)に昨年と同様に東京・学士会館にて実施されました。今年度も総会及び懇親会の前に講演会と落語を実施しました。最初に実施されました講演会ですが，旧制松山高等学校・大阪大学卒業で現在は石油分析化学研究所所長の藤田稔氏より「21世紀の日本のエネルギーとカナダ・オイルサンドからクリーン燃料油の製造開発研究」という題でお話をいただきました。過去のさまざまな研究が数多く紹介され，

### 3. ホームページの原稿募集のお願い

理学同窓会のホームページ (<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/bio/rigaku/index.html>) では下記の2項目について同窓生の皆様からの原稿を募集します。投稿は郵便かメールでお願いいたします。なお，これらの原稿は同窓会会報にも掲載させていただく場合もあります。

#### 《会合だより》

同窓生の皆様の会合開催等の原稿を募集しています。それぞれの学科で同期会等を多々開催されるとお聞きします。今後はこの様な会を開かれたら本部事務局にもご一報下されれば幸いです。ホームページで報告したいと考えています。写真も歓迎します。また，会の開催案内もホームページの“ニュース”・“会合だより”により広報できると思いますので，是非ご活用ください。

#### 《会員近況》

近況報告欄の原稿を募集します。同窓生の皆様の近況をお知らせください。写真つきも歓迎します。ふるって投稿ください。お待ちしております。

送り先 宛名：愛媛大学理学同窓会

住所：〒790-8577 松山市文京町2-5

メール：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

### 4. 今後の活動

平成20年9月20日の総会時に今後の計画をマニフェストとして配布いたしました。それによりますと，1) 会報（第6号）の発行。本会報です。2) 卒業生に記念品を贈呈。平成21年3月の新卒業生に記念品を贈呈して卒業後の住所の連絡を呼びかけます。3) 理学部のキャンパス整備の協力。4) 名簿整備。同窓生の約半数の方の連絡先が不明です。今後も一層名簿の整備に努めます。同窓生の皆様のご協力をお願いいたします。なお，次回の総会を平成22年秋に開催する予定です。詳細が決まりましたらお知らせいたしますので，ふるってご参加ください。

非常に活動的なお人柄が理解できました。講演会後は昨年同様に古今亭菊志ん氏（愛媛大学教育学部卒，愛媛大学落語研究会 OB）より落語をしていただき，会場は和やかな雰囲気にもまれ，こちらも大変好評でした。なお当日会場で販売しました藤田稔氏の著書が完売したことも付け加えさせていただきます。

その後は総会及び懇親会へと進みました。今年の総会には総勢40名の方のご出席があり，松山からは野倉嗣紀理学部長（数学）・佐藤成一先生（生物）の先生方のほかに，9月の松山での総会で新しく理学同窓会長となられました城尾昌範先生がいらして下さりました。野倉嗣紀理学部長からのご挨拶の

後、就職担当の佐藤成一先生からもご挨拶をいただきました。そして城尾昌範理学同窓会長からは松山の現状を報告していただきました。会場には旧制松山高等学校同窓会東京支部・工業会東京支部・ユウカリ会東京支部・東京章光会・愛媛大学サテライトオフィス東京の斉藤照子氏など多くの方のご臨席を賜り、大変感謝している次第です。懇親会の乾杯では文理学部第1回卒業の三好昭一先生が挨拶され、その後は和気藹々と歓談が進みました。その後、理学同窓会東京支部として恒例になりつつある福引抽選会も実施され大いに盛り上がり、最後に学歌斉唱で終了しました。

全体としては若い卒業生の方の参加が少なかったことが残念だと思っています。やはりまだ同窓会活



動というものが知られていないのではないかと察します。改めて私からも現在の愛媛大学生には卒業後の連絡先を大学側へ連絡されるようお願い申し上げます。個人情報の懸念もあるかと思いますが、情報管理はきちんとされているとのこと。同窓会活動を担当する現場としましては、卒業生への連絡は切なる願いです。何とぞよろしく申し上げます。

現在の東京支部はまだまだ体力不足です。理学同窓会東京支部としての業務は以前よりも確実に増えてきただけでなく、校友会首都圏支部の一員としての業務もあります。今年度は6月に東京お台場にて第1回「新社会人&若手卒業生の集い」を実施しました。フジテレビ本社と日本科学未来館の見学でしたが、他学部同窓会東京支部の支援のもと理学同窓会東京支部が中心となって実施した次第です。このように愛媛大学が今後も生き残っていくためには、多くの方のご支援・ご協力が必要となってきております。一方で理学同窓会東京支部の幹事は現在僅か8名しかおりません。他学部東京支部との協力体制を築き上げていくためにも、更なる幹事役員の増員の必要性を強く感じております。首都圏在住の卒業生の方々には、どうかご協力をよろしく申し上げます。まずは東京支部総会・校友会首都圏支部の各行事に参加されてみてください。よろしくどうぞ。

東京支部総務幹事 佐伯 雅弘  
(理・数学・13回)

## 愛媛大学理学同窓会会則

(総 則)

第1条 本会は、愛媛大学理学同窓会と称する。

第2条 本会は、本部を理学部内（松山市文京町2-5）に置く。

(目 的)

第3条 本会は、会員相互の親睦向上を図るとともに、愛媛大学理学部（以下「理学部」という。）の発展に寄与することを目的とする。

(事 業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 会報の発行
- (2) ホームページの作成及び管理
- (3) 会員名簿の管理
- (4) 就職支援
- (5) その他必要な事業

(会 員)

第5条 本会は、次の会員で組織する。

- (1) 正会員

- ・愛媛大学文理学部理学科及び理学部の卒業生及び修了生
- ・愛媛大学大学院理学研究科及び愛媛大学理工学研究科（理学系）（以下「理工学研究科（理学系）」という。）の修了生

(2) 準会員

- ・理学部及び理工学研究科（理学系）の在学学生

(3) 特別会員

- ・理学部及び理工学研究科（理学系）の教職員

(4) 賛助会員

- ・愛媛大学文理学部理学科、理学部及び理工学研究科（理学系）に在籍していた教職員並びに本会の趣旨に賛同する者で役員会において承認された者

(役 員)

第6条 本会に、次の役員を置く。

- (1) 会 長 1名
- (2) 副会長 2名
- (3) 幹 事 若干名
- (4) 監 査 2名
- (5) 顧 問 若干名

(会長等)

第7条 会長及び監査は、会員の中から役員会が推薦し、総会において承認する。

2 副会長及び幹事は、会長が委嘱する。

3 顧問は、理学部長及び理学部事務課長並びに役員会で承認された者とする。

(任期)

第8条 役員(顧問のうち、理学部長及び理学部事務課長を除く。)の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 役員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

3 役員は、任期満了後も後任者が就任するまで、その職務を行うものとする。

(会務)

第9条 会長は、本会を代表し、会務を総括する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときはその職務を代行する。

3 幹事は、会務を掌理し、本会の運営に関する企画等を行う。

4 監査は、本会の会計を監査する。

(会議)

第10条 会議は、総会及び役員会とする。

2 総会は、正会員をもって構成し、2年に1回開催する。なお、役員会が必要と認めるときは、臨時に総会を開催することができる。

3 総会は、会務及び会計の報告、役員承認、会則の改正、その他本会に関する重要事項を審議する。

4 役員会は、役員をもって構成し、毎年1回開催する。なお、会長が必要と認めるときは、臨時に役員会を開催することができる。

5 役員会は、会計承認、役員推薦、本会の

運営に関する具体的事項、その他会長が緊急を要すると認めた事項について審議する。

6 会議の議長は、会長とする。ただし、会長に事故があるときは、副会長がこれに当たる。

7 議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(支部)

第11条 本会は、必要に応じ、総会の議を経て支部を置くことができる。

2 支部に支部長を置く。支部長は、当該支部の正会員の中から互選により選出し、総会に報告するものとする。

3 支部の運営に関する事項は、当該支部において定める。

(会計)

第12条 本会の経費は、会費及び寄付金、その他の収入金をもって充てる。

第13条 会費は、入学の際に、終身会費として別に定める額を納入するものとする。

第14条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わるものとする。

(雑則)

第15条 正会員は、住所、姓名、職業等に変更が生じたとき、及びその他必要な事項はこれを本部に連絡するものとする。

第16条 この会則の改正は、総会で審議する。

第17条 この会則に定めるもののほか、本会の運営に関し必要な事項は役員会が定める。

附則

- 1 この会則は、平成20年9月20日から施行する。
- 2 愛媛大学文理学部理学科ならびに理学部同窓会規約(昭和54年8月18日施行)は廃止する。

\*\*\*\*\*

## 愛媛大学(財)白楊会館 結婚相談所のご案内

理学同窓会の皆さん、お元気でご活躍のことと存じます。

さて、理学同窓会ホームページでも紹介していますが、本誌上でも愛媛大学(財)白楊会館結婚相談所についてご案内いたします。白楊会館は愛媛県立女子師範学校同窓会によって設立された組織及び会館(竣工昭和9年)でありましたが、現在では、その土地建物は売却され、組織は愛媛大学の6つの同窓会の支援を受けて、結婚相談所運営を主な事業に活動しております。

理学同窓会の皆様及び同窓会会員にゆかりのある

方々の中には、日々の業務等に追われ、出会いの機会が少ない方もいらっしゃるかと思います。そのような場合には、白楊会館の結婚相談所のご利用をお考え頂くのも一策かと思えます。出会いから出逢いへの橋渡しにご利用下さい。以下に、結婚相談所利用の概略を記しますが、詳細については、結婚相談所に直接お問い合わせ下さい。

(1) 結婚相談の対象者：

- ① 愛媛大学の各同窓会会員及び愛媛大学教職員とその家族
- ② 上記の方々から紹介された方

(2) 申し込み手続き：

- ① 申込書(相談所より送付したもの)にご記入の上、身上書1部を添付下さい。なお、申

込書は相談所に請求下さい。

- ② 写真2枚程度（1年以内に撮影したカラーでサービス判程度のスナップが望ましい）。
- (3) 費用：
  - ① 3万円（申込金1万円，諸経費2万円，3年間有効）。なお，3年経過後の継続の場合は，諸経費の2万円を納入下さい。
  - ② お見合い費用は，当事者双方の負担となります。
  - ③ 結婚成立の際は，当事者双方から2万5千円ずつ，計5万円を頂きます。
- (4) 申込受付日時：毎週水曜日13：00～17：00（相談員待機） TEL・FAX (089) 923-7210

申込書類の郵送も可能です。

- (5) 相談日時：申込者と担当相談員の双方に好都合な日時に調整・設定されます。
  - (6) 問い合わせ先：〒790-0825 愛媛県松山市道後樋又10番13号 愛媛大学朋友会館内 愛媛大学(財)白楊会館 結婚相談所 TEL・FAX (089) 923-7210
  - (7) 秘密厳守について：スタッフは秘密を厳守します。また，相談申込者の方々にも，相談所で知り得た一切の事柄・情報は，秘密を厳守して頂くようお願いをしております。
- (文責 理学同窓会副会長及び白楊会館理事 東 長雄)



**愛媛大学埋蔵文化財調査室からのお知らせ**

**旧愛媛大学歴史学研究会保管  
考古資料について**

1951年に創設され，全学サークルとして活動を続けてきました愛媛大学歴史学研究会は，2004年3月に在籍会員がすべて卒業し，その歴史に幕を閉じました。長年にわたる同会の活動は多くの成果をあ

げ，その一部として，採集された考古資料が部室に残されておりました。今後これら考古資料は，愛媛大学埋蔵文化財調査室において所蔵保管し，公開活用していくこととなりましたので，お知らせいたします。なお，これら資料について，照会あるいは情報のある方は，下記までご連絡下さい。

2008年6月  
愛媛大学埋蔵文化財調査室（吉田）  
連絡先：089-927-9127



**理学同窓会会計報告**

**平成19年度（2007.4～2008.3）会計報告**

収	入	支	出
前年度繰越	27,525,637	通信費	72,978
会費	1,200,000	名簿管理費	107,100
利子	12,568	東京支部補助	409,975
		役員会開催費	173,069
		会報発行	983,422
		卒業生記念品	85,794
		その他(備品等)	611,012
収入計	28,738,205	支出計	2,443,350

平成20年度へ繰越 26,294,855

**愛媛大学理学同窓会 会報 第6号**

(文理学部同窓会報より通算18号)

平成21年2月 発行

愛媛大学理学同窓会

〒790-8577 松山市文京町2-5 愛媛大学理学部内

電話：089-927-8424

メールアドレス：rigakudousokai@sci.ehime-u.ac.jp

ホームページアドレス：http://www.sci.ehime-u.ac.jp/bio/rigaku/index.html